答えのない「?」を対話するヒント

もしも、わが子にこの時代に大学に行く意味を問われたら

「今時、大学を卒業したからといって、将来安泰とは限らない。この不確かな時代に大学に行く意味はなんだろう?」――もし、わが子から真剣に問われたとしたら、どのように答えますか? 返答に窮する保護者の方も多いのではないでしょうか。
答えのない、そして、人それぞれに異なる「大学に行く意味」を、親子でどのように対話すればいいのか。専門の異なる4名の識者の方にお話を伺い、対話のコツを探りました。

取材・文／塚田智恵美

「正解を知っている親」をやめる

作家・演出家　鴻上尚史

大学に行く意味はちゃんと途方に暮れるため

僕がもし、自分の子どもから大学に行く意味を問われたら、「ちゃんと途方に暮れるため、じゃない?」と話すでしょう。

最近は正解がわからない時代と言われます。でも高校生までは、親や教師が「こっちが正しい」と導いてくれる。自分の頭で考える必要はありません。日本で教育を受けてきた多くの人にとって、初めて「こうしたほうがいい」と言われない時期が大学生活です。初めての自由。何をすればいいのか、誰の助言を聞いたらいいのかわからない。そこでちゃんと途方に暮れる経験をして、初めて「さあ、自分で考えて判断するしかないぞ」と思い始めます。

会社に入ったら、会社の命題がある。ちゃんと途方に暮れる時期を飛ばして会社の正解に乗ってしまい、人生後半で途方に暮れては遅いんです。

対話を邪魔する「使命感」

ところで皆さんは子育ての目的は何だと考えますか。

多くの保護者が「子どもを守り育てること」だと考えるでしょう。子どもを守らなければと思う気持ちは、立派な使命感です。でも、こうした答えのない問いを投げかけられて、つい「良いアドバイスや知恵のある言葉を与えなければ」と思ってはいませんか?

思い返してみてください。自分が子どもだったころ、「世界のすべてを知っている」風の教師より、「先生もわからない」と正直に言ってくれる教師を信用しませんでしたか?

それなのに親になると、つい何で

僕の指示どおりに演技をした俳優は、その舞台の評判が悪かったら、僕を恨むしかないんです。でも、自分でその演技を「選んだ」と思えると、どんな結果でも納得ができる。子育ても同じじゃないでしょうか。親も、よかれと思ってアドバイスしたのに、あとで恨まれても困るよね。

撮影：©TOWA

こうかみ しょうじ●1958年、愛媛県生まれ。早稲田大学卒。1981年に劇団「第三舞台」を結成。94年「スナフキンの手紙」で岸田國士戯曲賞受賞、2010年「グローブ・ジャングル」で読売文学賞戯曲・シナリオ賞受賞。近著に『「空気」を読んでも従わない』(岩波ジュニア新書)、『同調圧力』(共著、講談社現代新書)など。

も正解を知っている〝スーパーな親〟を目指してしまうんですよね。

僕は、子育ての目的は「健康的に自立させること」だと思っています。それはつまり「大学に行く意味は？」と問われて「父ちゃんも確信に満ちた答えをもっているわけではないんだけど…」から話し始めるのが真の子育てだということです。

〝スーパーな親〟を目指してしまうと、困ったことに対話ができなくなってしまいます。例えば、子どもが悩んでいるとき。子どもと話す前から「子どもが自分で決めるべきだから傍観する」か「子どものために介入する」か、と二択から選んでしまう。その前に、子どもの顔色を見ながら、まずは会話のキャッチボールをしてみればいいじゃないですか。

似たようなことが、舞台の演出でもよくあります。デザイナーの衣装プランと俳優の希望が合うかと迷って、演出家が提案できずにいる。完璧な提案をしなければと思ってしまうからです。

でも僕は俳優さんに直接「この服どう思いますか？」と聞くことから始めます。すると「私、緑色が嫌いなんです」と自分の希望を話すかもしれない。そうやって対話していけばいいんです。

対話を邪魔するのが使命感です。まずは〝スーパーな親〟をやめて、大人同士で対話の練習をしてみてはいかがでしょう。

親にできることは「自分で気づく」へ導くだけ

もしかしたら親のあなたが見て「この子、本当は、こんな道に進みたいんじゃないか」とわかることもあるかもしれません。一番残念なのは、それを「命令」に聞こえる言い方で子どもに伝えてしまう親です。そうではなくて子ども自身が自分で気づくことが大事なんです。

例えば僕が舞台の演出をしていて「この場面では思いが募って、相手を抱きしめるくらいするんじゃないかな」と思ったとします。俳優は僕の指示を聞いてそのまま演じた。そして開演後、お客さんに「あそこで抱きしめるのは興ざめだった」と言われたとしたら？ その俳優は、僕を恨むしかないでしょう。

それよりも、まずは僕と俳優で、意見を交わしてみる。「ここで何か愛情表現をするんですかね？」と相手に聞くんです。その結果「このシーンでは、相手を抱きしめたほうがいいな」と俳優自身が気づいて選んだのなら、お客さんに何を言われても納得できるはずです。

進路選びも同じです。「○○大学の何学部に行ってみたら？」と親に言われて何も疑わず、そのまま子どもが行って、もし満足いかなかったとしたら。親切心から言ったとしても、のちに子どもから「親のせいで」と恨まれますよ。

イギリスに「馬を水辺に連れて行けても水を飲ますことはできない」ということわざがあります。最後にやるのは本人だから、本人が選ばないと。親にできることは、自分で気づく形に導くことだけ。そのためにも〝スーパーな親〟をやめて、対話を始めましょう。

ここから対話をはじめよう

一緒にご飯を食べながら「わからない」ということをシェアする

「そっか。私もわからないわ～。おいしいものでも食べよう」と一緒に食卓を囲んだらどうでしょう。私たちはつい、答えを与える・もらう関係になってしまいがち。「わからない」を共有し合う空間はなかなかありません。この雑誌を食卓に置いて「ほかの子も悩んでいるらしいよ」と話せば、きっと子どもも勇気が出るんじゃないかな。

深く考えるための1冊

学校ってなんだ！ 日本の教育はなぜ息苦しいのか

工藤勇一・鴻上尚史／講談社

学校改革で話題沸騰になった、前・麹町中学校校長の工藤勇一さんと鴻上尚史さんが、日本の教育や学校現場が抱える問題点について対談。日本特有の同調圧力や、世間――親も子も苦しめられているものは一体何か、その正体をより深く考え、あたりまえを疑うためのヒントに。

何のため、がなくても学ぶのは楽しい

タレント　スザンヌ

何気ない会話の裏で起きる、心の動きを知りたくなる。仕事の資料ひとつ、自分の見方や捉え方が変わる。**学ぶことで世界がどんどん広がり、何気ない日常が豊かになる。**学ぶって楽しいんですね。

子どもの「なぜ学ぶの？」答えられず、大学へ

35歳で高校を卒業し、大学に進学しました。きっかけは当時小学一年生だった息子に「ママ、なんで勉強しなきゃいけないの？ 宿題って必要？」と聞かれたこと。芸能活動のため高校を中退していた私には、学ぶ意味が語れず「大人になったら嫌なことを我慢しなければいけないときもあるから、その訓練じゃない」と咄嗟に答えた。だけど、本当にそうかな。学ぶって我慢すること？ ちょうどそのころ、高校時代の先生から声をかけてもらって、高校卒業に再挑戦することにしたのです。

リビングで子どもと並んで座って「どっちが早く終わるかな」と二人で宿題をしました。早起きしてレポートを書くことも。そのうちに、知らないことをわかっていくのが楽しくなってきて、大学進学を決意。日本経済大学福岡キャンパスに入学しました。

仕事や家事・育児と両立しながら4年制大学に通う。一緒に講義を受けるのは、息子のほうが年が近いくらいの子たち。正直、大変です。だけど不思議なことに、学べば学ぶほど「もっと学びたい」と意欲が湧いてきます。例えば心理学。普段自分がイライラしていたり、他者との会話に違和感を覚えたりしたとき、講義で学んだこととふっと繋がる瞬間がある。「裏ではこんなことが起きているのかも」と思うと、少し人に優しくなれる。学ぶことで、自分の見方が変わっていくんです。

学び場に足を踏み入れれば、出会う人たちの幅も広がります。ビジネスの第一線で活躍する方や、海外に拠点を持つ方。私が知っていた世界の外に、こんなに面白い人たちがいた、と衝撃を受けることもありました。

教え合う親子になりたい

テレビでニュースを見ていても、これまで戦争や政治の話題なんて「自分とは関係ない話」としか思わなかった。だけど、大学で学んでからは、自分の暮らしとの関係を考えるようになりました。遠かった世界が、少しだけ自分ごとになった。ニュースを見ながら、子どもと「一緒に考えてみよう」なんて言って話すことも。学び始めは人より遅かったけれど、これからは親子でそれぞれ学んだことを教え合えるような関係になるのが理想です。

もし「大学に行かなければいけないの？」と子どもに問われたら、私は行かなくてもいいと答えます。私は行かなかったから。それでも仕事はできました。だけど今、ようやくわかったのは、学ぶことは財産になるんですね。仕事で見る、何気ない資料の見方が変わる。その資料を苦労して作った人に、思いを馳せられるようになる。狭い世界がどんどん広がっていく。何かのために学ぶわけではなく、学ぶこと自体が暮らしを豊かにするんです。「行くも行かないも、どちらでもいいよ。でもね、学ぶって楽しいよ」って子どもには言ってあげたいな。

ここから対話をはじめよう

大学に行く意味の前に「行きたいの？」と聞いてみる

案外、大学に興味があるから、子どもも大学に行く意味を聞いてくるんじゃないかな。私は大学に「行かなければいけない」とは思わない。私のように大人になっても学び直しはできますし。でも、その年齢でしか味わえない体験もあるから、子どもが行きたいなら応援します。まずは「あなたは行きたいと思う？」と聞いてみてはどうでしょう。

すざんぬ●1986年生まれ。熊本県出身。テレビ・雑誌など多方面で活躍。2014年に男の子を出産し、2015年に地元・熊本県に移住。2022年、日本経済大学経営学部芸創プロデュース学科ファッションビジネスコースに入学。YouTubeチャンネル出演など活動の幅を広げている。

「大学くらい…」の裏にある強迫観念

佛心宗大叢山 福厳寺住職 大愚元勝

たいぐ げんしょう●540年の歴史を誇る禅寺、福厳寺の弟子として育つ。寺を飛び出して32歳で起業。複数の事業を立ち上げる。40歳を前に寺に戻ることを決意。多様な切り口から仏教を伝え、YouTube『大愚和尚の一問一答』は56万登録者を超える（2023年1月現在）。

こんな社会で、わが子が自立して生きていけるか。不安ですよね。でも「与える人」になれば、どんな場所でも生きていける。きっとお子さんは大丈夫です。親のあなたが、心から安心していれば。

「お金がないと」の呪縛

皆さんが共通してわが子に願うのは「無事に自立し、社会を生き抜いていけること」でしょう。でも、それははたして、そんなに難しいことでしょうか。犬でも鳥でも生き物は、大きくなれば自然と親元から離れて、勝手に生きていきます。

ところが人間だけが「ちゃんと親元から自立できるか。大学くらい出ておかなければ、この先困るのでは」なんて悩んでいる。なぜなら、皆さんは無意識のうちに、お金の心配をしているからです。今の世の中、衣食住すべてお金さえあれば手に入るように見えます。だから「お金さえあれば安心」の裏返しで「お金や稼ぐ力がないと不幸になる」と強迫観念にとりつかれてしまう。

本来は「大学に行く選択肢がある」というだけの話。しかし、わが子がお金に困らず食べていけるかと、無意識のうちに不安を抱えた親は、つい、大学入試や就職で「選ばれる子」になってほしいと願うのです。

私の寺に親御さんが相談にくることがあります。皆さん「子どものしたいことをしてほしい」と口では言います。でも本心では、子どもをそのまま社会に放り出す勇気も、心の準備もない。親自身が、なんの保証もなくこの不確実な社会を生き抜けるか、不安だからです。

幸せの鍵は「与える人」

ではどうすれば、その不安を手放せるのか。ブッダ（仏）の説かれた戦略は「人格者になる」でした。聖人君子になれという意味ではありません。私たちはつい「自分が恵まれるか」を考えてしまう。でも笑顔やあたたかい言葉、自分にできることのなかから「何を周りに与えられるか」と考える人は、どんな場所でも必要とされて、大切にしてもらえるでしょう。

私もそうでした。生まれた寺を飛び出してアルバイトした先で、店長に大変良くしていただいた。それは寺の厳しい修行で「人に喜んでもらえる仕事をしろ」と言われ続けたので、自然と自分の働く店だけではなく、隣の店の前も掃除していたから。まず自分が「与える」ことで、居場所を得たのです。

保護者の皆さんには、強迫観念のなかで子どもが「選ばれますように」と願うのではなく、「与える人になれば、どんな社会でも生きていける」と安心してほしいんです。仏教とは、苦しみを手放して安心に至る道のこと。親が心から安心していれば、子どもは飛び立つことができます。大丈夫です。

ここから対話をはじめよう

内仕事で「与える」訓練を。1日寝込むなら3日寝込んで

日頃から子どもと話す習慣がなければ、いきなり対話は難しいでしょう。手っ取り早い方法は、親が寝込むことです。そして掃除や洗濯、ゴミ出しなどの内仕事を手伝ってもらう。1日で無理して起き上がらず3日くらい寝込むと、子どもは「この家のために何ができるだろう？」と考え始めます。これが周りに「与える」訓練になるのです。

深く考えるための1冊

人生が確実に変わる大愚和尚の答え 一問一答公式

大愚元勝／飛鳥新社

日常で抱えた、停滞感や悩みの出口はどこにあるのか。YouTubeで人気を集める、大愚和尚の人生相談をまとめた一冊。「執着を手放し、視点のシフトを促す」仏教の教えを基に、実際に生活のなかで視点を変える具体的指針が書かれている。親子で読むのにもおすすめ。

大学での回り道が、未来への投資に

教育経済学研究者　慶應義塾大学教授　中室牧子

まず、生涯年収は上がる

株や債券を買うことを「投資」と呼びますね。「きっと将来、値上がりして、利益が得られるだろう」と思うから、お金を出して株を買うわけです。これと同じように「大学に行く」ことを、人間という資本に対する投資だと考えてみましょう。すると、大学に行くことによってまず期待できる便益は、将来の賃金の上昇です。

学歴別で生涯の賃金カーブを見てみると（61ページ、図）大学・大学院卒は、年齢とともに賃金が上昇するカーブの勾配が、他の学歴に比べて大きくなっていることがわかります。

また、高校卒業後すぐに働き始めた人と、大学・大学院を卒業してから働き始めた人の間では、生涯年収に1億円ほどの差があるという研究もあります。「学歴が高くなると生涯年収も上がる」と言えるでしょう。

しかし、大学に行くことによって得られる利益は、はたしてお金だけでしょうか。

3年で陳腐化する知識より「一生学ぶ力」の価値

短期的な視点で考えると、利点の一つは、すぐに仕事で活用できる、専門的な知識や技能を学べることです。例えば大学でデータ分析を学んだ人が、新卒後マーケティングの部署に配属される。当然、まったくデータ分析を知らない同期に比べて、すぐに活躍できる機会は多いはずです。

ところが、知識や技術は日々新しくなります。今日の知識は3年後には陳腐化する。その都度、学んでいく必要があります。そのとき手取り足取り教えてくれる先生はいません。

そして、実際の仕事において知識を学んでハイ終わり、という場面はほとんどないでしょう。自ら、目の前の状況に対して問いを立て、適切なリサーチを行い、分析していくプロセスが求められるはずです。

大学は、まさにこの「自ら問いを立てて学ぶ方法」――探究の仕方を教えてくれる場所です。長い目で見れば、興味関心をもってさまざまなことを学ぶ力、そして、答えのない問いを突き詰めて考えていく力を身につけることこそ、社会に出たあとも、さまざまな場面でお子さんの助けになるはず。それはお金だけではなく、将来の働きがい、安定的な生活、幸福といった利益も、もたらしてくれるのではないでしょうか。

若いうちの試行錯誤がマッチクオリティを上げる

時々「特に学びたいこともないのに、大学の4年間に学費を費やすのはもったいない。その分働けばお

学歴が高くなると収入は上がる。でも、それ以上に大事なのは、若いうちに回り道をすることです。大学の場で探究の手法を学びながら、何が好きか、何に向いているかと試行錯誤してみる。自分の適性を知るための試行錯誤は、将来の幸福のための合理的な〝投資〟だと思いますよ。

なかむろ まきこ●慶應義塾大学卒、コロンビア大学で学ぶ（MPA,Ph.D.）。専門は教育を経済学的な手法で分析する教育経済学。日本銀行や世界銀行での実務経験を経て、2019年から慶應義塾大学総合政策学部教授。2021年からデジタル庁のデジタルエデュケーション統括。

金を稼げるのに」と考える高校生もいるようです。例えば高卒で社会に出れば、すぐに一定の給料をもらうことができる。大学の4年間を働く期間にまわした場合、得られる予定の額が目の前にあるのに、それを逃すと損失になる、と考える。これは将来得られる利益よりも「目先の損」が嫌だと考えてしまう気持ちが働いているから。経済学の用語では「損失回避」と言います。

目先のことだけではなく、長い目で見たときの人生の便益を考えなくてはいけません。そのために大事なのは正しい情報を調べること、そして「何に対して投資をすれば生涯で最もリターンが高くなるか」と考えることです。

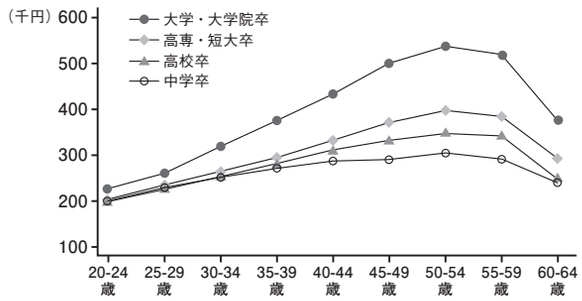
株式投資の場合、何を買っても同じではなく「どの銘柄が一番値上がりするか?」と考えるでしょう。教育という投資でも同じです。ただ大学に行けばいいだけではない。例えば、どんな学問分野を選べば、あなたのお子さんは生涯トータルで高い利益を得られるでしょうか。

ここで大事なのは「マッチクオリティ」の考え方です。マッチクオリティとは、簡単に言えば適性のこと。本人の適性に合った学問分野で学ぶことが、教育による成果を高くするという研究もあります。

ところが高校3年生の段階で自分の適性に合った道を、確信をもって選べる人は少ないでしょう。ですから大学は、さまざまな分野の講義や探究活動を通じて、自分は何がやりたいか、何に向いているかと試行錯誤し、興味・関心を追究しながら、自らの適性を知る機会でもあるのです。

大学に行っても、結果的に回り道や試行錯誤をするかもしれない。それは一見すると非効率に見えるでしょう。しかし、若いうちに試行錯誤することによって、より適性に合った仕事に就くほうが、生涯トータルで見れば得があるのです。回り道のなかで、何がその子を最も伸ばしてくれるのか、ぜひ親子で一緒に見極めてください。

図 賃金カーブ（男子、企業規模計、所定内給与額）2016年



北條雅一（2018）「学歴収益率についての研究の現状と課題」日本労働研究雑誌　図2Bより改変

ここから対話をはじめよう

「自分の興味関心は? 今、大学で学ぶなら?」親のあなたが学びたいことを話してみる

子どもの興味関心は身近な人、特に親から影響を受けることが多いものです。私自身、「教育」経済学を専攻したのは、親が教員だったことも影響していると思う。親のあなたが何に興味をもっていて、今、大学に行くとしたら何を学びたいか、子どもと話してみると、子ども自身の興味関心を一緒に考えるきっかけになるかもしれません。

深く考えるための1冊

「学力」の経済学

中室牧子／ディスカヴァー・トゥエンティワン

「ゲームは子どもに悪影響か?」「子どもはほめて育てるべき?」「勉強させるためにご褒美で釣るのはいけない?」といった教育のテーマを経済学的手法で分析し、解き明かした一冊。根拠のない教育論、個人の経験や思い込みから離れて、データを基に教育の効果を考えたい人におすすめ。

「誰も答えを知らない」、そこから真の対話は始まる

進路観や働き方は、親世代のころと比べて急速に変化しています。高校生のわが子とどこまで関わるべきか、迷う方も多いでしょう。

「高校生と保護者への意識調査」※では、保護者の意識の変化が示唆されています。進路の話をするときに保護者がよく使う言葉として「勉強しなさい」「とにかくいい大学に入りなさい」といった回答は減少傾向にあり、かわりに「自分の好きなことをしなさい、やりたいことをやりなさい」などの増加が見られました。一方で、高校生側は「好きなことをしなさい、だけで終わらないでほしい」「アドバイスしてほしい」などの回答が増加。親に関わってほしい気持ちがうかがえます。

子どもと一緒に考えながらも、親の答えを押し付けはしない…一見難しくも思える対話のヒントが、4名のお話のなかには随所に見られたのではないでしょうか。親としての責任感や不安、捨てられない期待。そうした「対話を邪魔するもの」を少しの間だけ脇に置いて、親子でフラットに「どう思う?」と話してみてはいかがでしょう。本記事をぜひ、対話のきっかけにご活用ください。

※「高校生と保護者の進路に関する意識調査2021」一般社団法人全国高等学校PTA連合会・株式会社リクルート合同調査